玉篇小樟獨步

下

竹内文庫

源氏物語玉小櫛補遺下巻

鈴木朖著

初音巻

けさうとしまふ（土のひら左）ほうげうそ（土のひら左）ほうまう（句きう）しゅうるうろ

ふるくま（四のひら左）ふるハ御るふ古るを兼るるあり。御歴八年月をうけ。四古れ

初春ふ對へて

物まめやうに（寄）ぎ〻しき捉（土のひら）考陸宮のれるすあり。戯まてうくいひふ

しるあり

さぬく（土のひら左）さひとうけるたくて。万葉ふあてきぬのさぬしてを

いうよ志ふ。たるるうあ〻ん（同）下ゑだいでのあざうの天のたあつひ

しのひ〻るあうそ生ふよふくふ生〻るべ〻

須賀通古之章
古川氏之記

んまどハ〜ゑひ〜 十四のむら 左 小橋の板のめ〜この一すぢて両方ともに
罪あるべきすぢ〜て下の文よハ出雲むくひといふるを自の上ふ
うけていへるなり〜
すくふるるうハべどうハ 云云 右 十九のむら こゝの文ことすくふるうべ
どううて下よすぢる筋のんあれハうるさんめう我るを中ねハ
さもあ〜べどいとうつ〜とおぼえとあるさるを小橋よりうよ心ば
さぐら是〜ゝまうらるさ〜をうるハ〜うて云〜いう是つるハ
中くよりう〜回流のまくまていとよくきこゆるをやうるせ〜と
い〜絶ぶるハ〜よ修るるまううるハ〜をうるまう〜とそいかゑ
いもん

蝴蝶巻

ほうの里よハ 云云 二のむら 右 花ゑるの色者このおまくよハまぐふりぬるやと外
の里よハめづ〜〜うええきこゆとあり下よみハ盗すぢる梅と
今さうよ 云云 とあるをえるべ〜
ほうぢ紀くくのちつよ 同 ちつうハちるうを字〜倶きうとえ也はつか
といふ絶くふうあちん
ゑんう〜の約どのの小 同 左 ゝ文上ようのつぢ紀いぐまてきこえんぐ〜ゝ
上う下うの小脱ぶてもあるうとおもへ〜〜よ嘉基云ゝ上の文べぐての
関よえせ〜ゝ是どのどハぐあるべ〜その山のさ紀ようこ紀まひてこ
とよてきうてこの下よこあるこさまよ系るといふことをこ考る文法

あり。竹取物語（下の九のひら）れうくはつはさくらよりはきこえうるはせのひて。云云。同（十五のひら）老おとろへ給へるさまをんなをさくんこそこひしからえといひて。云云。こまくも閑文よはあるべしといふこそうはぬ女房あんど（三の丸右）むまと中宮の女房といふあるべしやがてまうそ給ハで（七のむら右）傍注よ兵部々とあるハくどへつまの下の人くもおぼろへつけてんはべる。兵部々のこまかぎるふあるべし。人この上まで句きるもとろしはよおまつ（八のむら左）おまハおろけのつまりくるあり。俗ふうてぬるてといふうぐく

こあるくうあるくまもゆえかハる給ふ（十の丸右）さふらふ人のまを給ふとふべたうくある。必侍あるべし。次よこあるくまもゆえうくるのふとあ

るふまうひくるう

んむけあと（十一の丸右）此上よ句きるうろし。此句へつづけるむべし

こまハうどめいくるゆそひくる（同左）ゆの下よぞもどひとつおちくう

くどのたうまと（十二の丸左）たふれと書べし。たハまよ同し。作とせるハ侍

あう

はうくつとハさくくるよ（云云右十五の丸右）さ。ぷてきくべし。下へつづくるうろし。

ぷよ句と傍注せるうろし。おぼいくぷのぷハふくめて面くる格まて。

上のぷの結びよハあくば

橋（司）の（云云右廿の丸）注よくきこえくるるあるをふ橋よ物二句くろえばとあ

るハいくば

つぶ〳〵とこえ語へる 同 左 こゝまてきゝうべし。多ありとはだつれとをつゞけて
よむべし
いゝふせんとおぼえて 廿二のむら 右 おがしてあり。おゞえハ去あやまりあり

蛍巻

久ふいめづ〳〵ろよおう〳〵くおほゆるかをつま 九のむら 左 湖月。ぷゞ。ぷるまゞの
句。ともよろろし
せう〳〵くの度上人よ 十のむら 右 せう〳〵くきゝくゝかまくゝといふゞぬくゝある
べし。又ハあまくゝをはゞくゝと去らるを。假名よかくゝつしひゞめらるゝ
むとゞくゝ去く 廿二のむら 右 んゝゞゞくゝしおもふよ〳〵おのゞゞゞくゝとあつ
をおのゞをおとし。去くゝを去くゝよ誤まるあゝんだてらるおもむき

ゝとゝうゝとハ上のんあさげゝるゝ人ま孫どもゝとおもつまゝうにたゝゝくゝし記
人ゝとをゝうけていへつゝふ格の二の巻よ式不の伝ある得ゝまゝらゝ
いけるゝゝるゝゝて 同 左 一本よいつゝるゝゝるゝゝとあるをゝゝとすべし。
又式上ゝて句きるゝろゝし人のゝてきゝうべし
ふふゝゝぎをゝてかゝづゝ記ゝゝぞと 同 藝道のゝまゝう。小様二の巻小。
ゝゝまをゝも読あやまゝれゝゝう
人のゝうゝそハもゝどゝゝ記ゝぎゝゝう 廿四のひら 右 夕寄のん中の紙ゝ
そのおひ出ゝるおゞえ人ゞゝ 同 湖月師説ゝ。おゞえよ句きるゝろゝし
行へゝゝゝびゞゞゞよゝるゝゝと 同 左 おゝよゝるゝゝとゝゝむべし。ゝゝまをゝうふ
ゝとゝまんよハ上の人をゝ人のゝとすべきゝう

常夏巻

ところどころおほとゝぎすのまゐきまる（七の丸 左）一本よりまゐきてうとあるところ〜ざえき人よりあんちぢぬるぎさ（十の丸 右）ちゐんハ雑ちりふ様よりてよをはと

えられるハたゞべ〜」

ものえらし〜たつき（十四の丸 左）たつきハたまくきを誤まるなるべ〜

人〜もきやうさくなるれあハひどもあ〜んら〜（十五の丸 左）上よくゞ〜

もといひて又れあもひどもといひあ〜んら〜といふるゆゆゞゆ

おちあやまりあどあるべ〜

ゆふさまゆる（十八の丸 右）るハゆをを誤まるなり

のらりおやりゞれ（十九の丸 右）ゆもゞゞてきるハあやまりなり

篝火巻

げふよくこそと（二の丸 左）小櫛ふいたれつるゞとく一本よハともゝ〜ふ〜

うち松（三の丸 左）玉小櫛云云・嘉基云落くゞ物語ニよさい松のすゑ〜げふ云云

とあるさい云ハ析松よて今いふるり松なり・てもそまてと同じく

さい松なるべ〜・をり松うちゞ松ともよ析を折ともゝ折ともゝ誤るゝ

野分巻

あゞきをくこなる（四の丸 右）こなるてきるハるろ〜・あちゝをくこてゞし

きるべ〜・こきハ下のうつりるくつゞく者なりさてえんてまつるわゞ

とつゞくなり

おそひいづまゞ（八の丸 左）ゞハゞを誤まるなり・何すゞやとあやゝ〜て・

さて思ひ出てゝ是バといふ事あり

まぐさうゝもまゝかゝず（九のむら 右）こうゝしまゐるとハこうゝしをお

ろかをなくいへどこゝまてハあぐるをいへる

ひがゝゝるやみなん（十八のむら 左 云云 右）是ハ俗の作者の異下よて歌の詞なこ

とわつゝるあり上の哥をにくゝものゝとハひるゝ同しびがゝゝとハ

侍り俗る若の俗つまたゝつけるあり注俗まり

行幸巻

かくおがしいゝぬるあく（二のむら 右）上の巻の末の歌をみくる詞あり

やゝでいさゝうちつゝて（三のむら 右）一本いさゝうつゝうちつゝとあるよろし

うゝさいをひくよすゞれるゝ（十六のむら 右）さいをひのくよすゞれるゝ

人よ侍りさたるろし

ゝのつまをなくのはをなくもの（廿一のむら 右）一本以下よ人不ハまゝうぬべうし

をゝとあるゝ歌ハ形ものゝ下よどもゝ下おちるゝ

とゝ形ものゝ形ものゝおちるゝんどもゝ下くてハ下へのつゞけ

いゝゝあり

宮つゝくまくいそ紀おを侍ゝるハ（廿八のむら 右）女院の方へ参りたるまを

いふあり注さゝへ

ゝゝ紀いそおも（同 左）花の比説のゝゝくゝハよの俗ハをの俗あり

みこゝちつきくの人ゝ（廿五のむら 左）みこゝちハ親王方あり傍注ひがまを

歌袴巻

籾もあ〜ぬんち 四のむら 右 然〜てハえあるまゝ えんちゑあ〜ぬのえおちゝ
さてもあやゝうもてなるまぬるの 五の段 左 花の由説よろし
とり給ふ由紬を 六の段 右 給ふよてゝゝ切るろし
出のひてはゝくつとあど空え給 八の段 右 山廻つ紀いぐあり。侯あるべし。出給
ふまとあるゝゝ又ハ空えのふハ伊給とあるゝゝ
ゝやあどの嘆んドたまゝる人まて 八の段 右 まんぢハ憑しゝ。さてもゝ人ハ王蔓
君をいふあり
の給ふゝ紀の 九の段 左 のうふハ上よつけてきるべ紀あり。湖月の句ろし
籾くゝとひハあるる 十のむら 左 るハ空を侯きるあり
きこえぬことをあん 十三のむら 右 をハとの侯あり。きこえぬこともて円大花消ゑの

こゝをあり

槙柱卷

こゝら思ひまつめつゝをゝ〜るゝ 十の段 右 一本すぐ〜つるゝとあり
かくる空ゝ沙ゝ出んも 十三のひら 右 ふりハふりゝくゝのゝりまて。雪の縁よゝくるゝ
人もゝんぢぬべけまバ 十七のむら 左 ゝんずハ俗よあいきゝつゝすといふがゆゝ。
慍の字をあつるゝ。更ようゝもだ
はめのゝぐもさゝつどひてのゝひゑげく 廿二のひら 左 もゝぢの下。今一つ
ゝあゝゝをおゝせるゝるべゝ。の給ひゑげくゝとハふの方ゝゝもくゝゝ
はめのゝぐ ゝ いひぢぐくゝゝるを。紀方をむ称ゝゝて給ひといゝゝ
つまあうて 廿三のひら 右 俗よ。のくゝぬ良ゝてゝくゝといふゝあゝる

かハらぬ色よもつてよ（廿三のむら 右）つてよハつてんを誤まるなるべし。帝の出給の
下句よろしくしるなり。年のまゝまてハ下句とゝみ合ずして
今よんえうゝ思ひる（廿五のすゑ 左）るハ。の俤なり
あれるや（四十一のむら 左）るハ。の俤なり

梅枝巻

いとゝる事〳〵しく紀の守えつけ（四のすゑ 左）守え託なり。湖月けもゝよ濁りてきせる
きあやまりなり
るりのつぼをつがゝ（同 一行）一行よつぼをつがゝ
あ巻のえよ（五のむら 左）上の句ハ槿よりきゝとまる地のすゝれゝを不免る絹下句
人のとゝめんうとハ兵部ゝ宮のもうしかりなふ思ひなりまふ絹なりば
欲ゝなりもゝ世まりなりよべし
おゝくもおぼゝさまふ（十のむら 右）おもゝさの母とハ即ち紀さる絹のおりしきけゝひ
どものさしつどひまゝるあどをいふなり。傳注見るし
いとゝうくゝるる（十六のむら 左）一行の傍注よ出る弦をとえてつくろひるをい
ふとなるべし
伯使よからのなかどのいとゝぎとがまし。れぢんのえとよいまて（十八のむら 右）ゝぢと
ゞ波し紀てきるべし。これを下へつゞけよまゝ上のなかどのれそゝをと
あるべきなり

蓬束巻

くるしく思ひゝれ（二のむら 右）くるしくまで宰相君心中の絹なりゝれば

以下ふぐもゝ〜おくて八詞〜のもじ

人ゑゑよくれぬつきまくるく　十二のひら　左　俗よちとねもよりまくい事今か人や

いふがごとし

そのうしめ　十三のひら　左　老木と八三条宮をさしての給へるあり。細の説くちぬゝん

よりかもじ

うれうもれるゝきをもれるる　廿六の中　右　うくゑてきるべしうもれるてきるに

ろゝ綿をもみぢのゝきをうゝ。色をうゝ後よりけるむ時も上のうゝ後

よハゝきをゝれと。紐重ありて文つるゝ

上若菜巻

おがつうるくなんおがえるふ　六の中　左　ゑふぐのゝをおとせり

さゝつぢよ　五　右　萬代をつげの八告よりひりけり

さうくゝくおぼゝたうつるよ　四十三のひら　右　おがゝ八おがえを誤まるあり。

こゝ必紫の色自のゑをのゑくる様なるを上よりんよ者ことあるゑて。源

のれるゑのやうゑもきこゆきどもきよハあゝぢさて八上の紐はめあれて

とあるべきをや

えこもゑるさず　四十八のひら　左　上よりくゝぢこゝ様ともありて。ん故つゑ

の得ゑるまゝきまよゑゑゑふとあり

おゝやうゑて　五十三のひら　右　この詞ん誤ぐゝ。誤おちるどのあるゑや

れゝやづくゑもゑのぎうゑてきハこゑもれゑゑもゑるゑゝを

五十五のひら　左　女君おとゝふとハこゑもうし。源氏君との中もきハこゑよ

なほなふるもなかりしをとりふするなり。花盃の注疏。あやまりなり
うらへはきなひあつまりなゐ 右 六十三のむら ゐへりく。俗に一ッなとりふに同じ。
上の云くこものなるにをうけて。一ッなそれなにとりへるなり
こくらの年比つとむるつくも 右 九十のむら つらゝもいくぐんぬぐるに語なり
られどうりまうハおくらん 右 百三のむら さゞのにそれとおしむまづさぐらさる
祠なりかくて人にまぎるべくも云 云 まて大方にんゆるなり
人にまぎるべくもあらざりつる注けハひなと 同 注けるひ歌となるべし
かもしをおとせるなり

下若菜巻

ちらしなふべきすとも 右 十四のむら とものどを溜るハよろし

万のなかにつけてめでわたさく 右 廿一のむら あさく八溜まじりのつまりなるまて。俗に
真なごましきもをつぶきとりふどくめでおどろくするをりふなり
えなくばにほひなること其の内のかをりも 右 廿二のむら 白ひなるを。傍注に梅香と
せるなとろしこてまてきるべうらば。下へつづけよむべし。こをの内のか
をりもとらへるにて梅香をいえでもまぐるなり
我こころにあくべき。限なくあかひとらんと 右 卅九のむら あくべきまて。か
しきりてんゆるべし。限なくとりふまで。下にもあり極めていひ比れへ語
書中ぶくにある。皆同意なり
いとけしきこそ 左 五十の歌 けしきこそを俱まるなるべし。人には是(コト)まて
まぐれなへまとほゑなへるなり。傍注ひがことなり

いまハいとまゆるして　同　琴をぬへ内ぎひてのまふあり今も琴を雅あり
て休まゝ先行へとあり
さゝバふるうかをり　六十四のむら　右　ふるうといふ絃ハ俗よりちがあらぬ又できぬ
といふあさまり注ひがことあり茄墓云この絃きべてゝのゝくぬ
時よりの絃あり義くほ面侍一車とうまやをゝふと出あんとのゝ
まふ紙よいゝ山のくちりてゝへをおゝぬふるうありて出さま
ゝたあり女猿衣一腹も中指君むとつれ車まて出行ぬ母文侍うけ行へ
るゝ紀おもひやうゝ〜いうまうゝど行ひぬゝんとてはなづうゝ
まうあひをゝてすぐのゝ〜まへど成よるゝ〜くをやまゝくおかされ
てこよいいうまもふまうゝ〜姫とてやをゝひんとて　ゝうは

うゝへうゝう行を結境三うれ兼久の癈帝の生をさせ行ふとむとゝく
坊まの行へりしハいとふまうあり
女の分をゝ云　七十四のむら　左　傍注ひがまあり　これハすべての女れ分をの行へる
まてざてむ神とゝどあひあれまへる方くをさゝまへるあり
おまつさとも云　八十二のむら　右　肩出まる添迦とあるハひがことあり　見ハ添れん平の
欲まてこてあ是さゝれだあゝど見ゝやをゝふとうけゝり
うゝをろこふ　九十七のむら　左　ゝもゝ一つ衍あり
つくあ〜　百三のむら　右　つ紀あゝと同主と受えゝり　同ゝ約あるべゝ

柏木巻

ひさゝうえゝ先ゝひのそべ　四十のむら　右　ゝ先ゝふハ侍まえあハすとゝふが如

しゝ悲しく此時うゐ〳〵ぞむせゑくるおれよ人あらせあのくまどさもゝ
うハえゝゑらひ給ハぶるあり
枝さゝかハゝゝるを 四十二のむら 左 連理よハあゝでゝゝでさゝかハゝゝふるを
やゞて連理よりひあゝて求あへるといへるあり
白ひぞくよ似ぬ 四十四のむら 左 ふとゝくゝふ白ひとつゞけよむべゝゝふよ白
きゝ侍ゝろゝ
んゝゝるやうあゝゝ 同 以下よ脱文ありとゝ伊。紐もとゝのゝゝゝれ
んもつゞゝず。夕雾の雾のゝくまのゝふるもゝくゝして。忽よ柏本のゝに
うつまるゞいうゞゝまゝバあり

横笛巻

世を日の後入ゝんまゝハ 三のむら 左 徑をく崩ゝありて佛の堂よおもむ紀ゝふべき
ゝをのゝくゝるあり
うゝゝろめだけゝある 四のむら 云 左 花も添の出紐あり。傍注ゝゝくゝ
いゝでかゝらん 五のむら 左 かゝるらんのゝをおとせるあり
いゝろゝのゝ 六のむら 左 倍よいゝをとゝいふが如ゝ
ぬてゝゝおちて 六のむら 左 あよゝきいゝゝきゝのふとあるをゝてゝゝたゝゝゝ
ふゝとゝきゝえゝれどぬてゝといふ紐ハ出ぬ。ハ出を俱ゝるゝや

鈴虫巻

蓮葉ふを 四のむら 左 佛書無華葉の倍をゝれるゝゝバ葉ハ本ハ光ゞゝのゝあり。
さゝゝバ千葉蓮華といふゝもあるなり。光ゝるを葉といひ葉といへるハ文字

ようてんをゑあやまるものあり

いとうるさうしもけを（十の心ら 左）うるせうしを俱まるあるべし

夕霧巻

おまて（六のひら 右）おろけてのつまりるあり。凝（ぎ）くしとゝつ組もあり。折（ゝ）て

ともるハひゞこゝとあり

こゝちあく（十一の心ら 右）こ骨ちあくを俱まるあるべし

入方の月の山端近き後（十二のひら 右）廿日比のまゞ秋深あるよがくゝふるいゝゞ

ゑひてゝすけていもぐいゝゝべゝまどんゆゝゞおゞゆ

ぱとあゞゝちゝゝ（廿七の紙 左）ぱハ犬とすべし

名のせゝうえゝうの物（廿八の紙 左）せゝうえゝうハ州せゝうえゝうをどのせゝうえゝう

まて俗よ殺生といふよあゝまゝうせゝうえゝうゝていけどゝゝるゝるをといふ

あるべし

ひいおつゝうす名て遊ひ後（廿の心ら 左）後ひとあるべし

ゝ紀ゝゝゝゞゝひ後（廿六の紙 左）毛も後ひとあるべし

赤おもてのそあゝゝの引ゝ後（四十一の紙 右）一本そあゝのといふ四字あし

今ハこの所名の（四十四の紙 右）丹羽量云お所名をあるべし。のもゞ誤あり。

といへ

女ぞうゝ身をもてあん（五十一の紙 左）紫上の所ゝろをのべゝるやゞてこれ

作者のんとゝうべし

げよあまゝとゞまかうざまよ（五十四の紙 右）毛ハゝゞ大方よのゝまへゝ

夕雾のすをのくまふとゝふ法ハころ〳〵夕雾のすハ下ゝこのもぢくらけて
も空え法をぎうゝとあるをや
まつ〳〵海の云云左六十七の紙〜ふりゝゝて人をえまてく水ようつろひぬ
てふ名をバ赤〳〵えやハさるすハさ〳〵にあ〳〵ゞとありたてめやと
いふすをゝ〳〵えやといふハ名をやゝそもんとゝふべきを名をやゝち
もんといふゞゝ〳〵
ゝふんハ又ゝゝとさまよ六十八の紙〜ゝとさまよとハ宮の呂〳〵空えまゝふやよ
ゝとあるをいふあり世間普通の人よあゝりていへるふハあ〳〵ゞゞさて世
の呂ふゝとハ即次よ例のやゝまて云云とあるゝまあり
ゞゞ法ゝゝろをこ〳〵へ法七十二の紙〜ゝとまゝと呂ひあゞめて所とゝんと呂
右

ひあり法をいふあり哨の法ゝろ〳〵
ゝゞ〳〵ゝ紀ゝゞもゝいで法つべき七十三の紙〜小根よべきハべ〳〵あゞべし
左
とあまゝど今呂ふよべ紀ハ本のまゝまて上のすゞもの下ゝゝゞきゝ
ゞおゞの下ゝよやもゞゞのおちゝゝあゝん

御法巻

かゝせまゝ法ゝゝる三の紙〜一なようせ法ゝゝるとあるぞよ紀
左
たえぬべきゝのり七の紙〜哥のゝすくか紀内法同左二つともよ多よいひ
右
ゝけゝゝゝもさゝるすあゞゝ内法よもよ〳〵ある紀ゝ法華れ功力まて輪
廻をハあれ五條の涅槃ハ入んとするをいへる紀

幻巻

うまハ〜さを 六のひら 右 一本ようまハ〜ぎをとあるぞよれ

そのるれさらでもありちんかし〜と 十二のむら 右 こゝよてきるべ〜下ろふよ

〜ふ蛟〜とつゞけるむべ〜

いとるるゝのゝべき 十二のむら 右 るるハるゝの倡あり

ふぶきやゝよゝ〜んや 同 左 しやハ詞の中らよある疑ひのやあり下のふ

〜ゝ〜ん〜てとまるゝり

きの世よハ云 云 とゝのふよゝ 十八のむら 右 ゝのふるよハとあるべきるあり

かのまゝまのよろゐひ 廿二のむら 右 一本よろゐひとあるう

白宮巻

こ〜〜ハとよゝ〜 二の印 左 〜〜〜〜俗よりふひとつハあり。おゆくハと

とけるゝるろ〜

うちふるまひゝ〜るあ〜〜り 十の印 右 ゝ人るふ句きゝ〜〜るゝるろ〜〜あ〜〜り

〜〜きふ蛟〜

〜〜〜〜〜もいどま〜〜〜 十二の印 右 〜〜〜ハこと人ゝ〜〜んゝ上よ宮ゝんと

あるてふをゝを思ふべ〜もし〜〜〜〜〜ゝ〜ハ宮ハとゝるべく思ふる

中ふねつれ〜〜〜り 十六の印 左 一本つれ〜〜とあるゝ

竹川巻

〜〜〜げや 云 云 十二の印 左 傍注〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ハ少ねのゝ枝をゝんるよつけて。

〜〜ゝるゝを思ひゝ〜るゝり思ひはゞめんとあるゝて〜〜べ〜

哥 袖ゝあ〜やハ 廿の印 右 一本あ〜れやとあるまゝ〜るゝと〜ふ枝よあり。

されどさ〜でもあるんう

哥云云 左 廿四のひら 丹羽曼云。結句のくもハとパるべし。爰よんをうつけあど

ちるんをいふちるべし。とうくつる

いくいくくくしるくう 廿六の裏 右 くしるくるとあるくを書俱きる

ちるべし。ゆくよある皆同しく

紅梅巻

さ〜つぢよ 二の裏 右 一本よさ〜つきよとあるよ。兄弟のついでをいふ

よあ〜ぢらく〜しう巻やうちるんだへものしまふるをいふまう

ちうのちうまふ 同 こてよ句きるところ

あ〜まほ〜う。もてあ〜 同 あ〜うまてきうてもてあ〜の句げづ

るべ〜。もてあ〜とハ世のくのもてあ〜まう

中のあもうちすぐのひて 四の裏 右 お次てあう。すぐのひハすぎるてすぢハつ

ぎちう。おつすぐ〜てといふ組もおひつぎてあう

小方そひて付〜ひ給ふ 五のひら 右 ハもど 衍あるべし。一本まくへばとあるハ

おし〜まさもるやうちれど。粧ところ〜

ちゆ心ぢせのふふや〜ちる 六のひら 右左 ちるハあ〜ぬを俱きるちるべし

世中ひろ北内き 七の裏 右 禁裡の文つくへの事をの給へるあう

いそぎまあうつるや 十の裏 左 やハ。ぷのもじあう。平ちるよあ〜ば

ちるまきこゆ 十一の裏 右 ちるまでのでもじを脱せうとえゆ

くもく〜の給て。 十二の裏 左 てもじいうど。衍あるべし

橋姫巻

おのゝくおとすけまさうち侍 三の巻ら 左 侍よ句さしたるろし

とり〳〵かたるゝし侍 六の巻 左 この侍もきるべゝ〳〵

こゝろのおきてやいうもと 十の巻 左 そゝてきうて・やもゝの句

をけづるべし

えおもひすてぬとをん 同 とをんの上よりよりとゝいふ袖をふくめ

てんはべし・されバ次よりあげきゝ侍りまふとあり・すべてどもゝ

の上ハ必きる〳〵袖をる宮まりをまゝどまれよハてく袖ゝうけ

るもあるを・大うゝさけるぐひのふくこゝるもゝあるあり

みうゝどハきゝとつてまても 十二の巻 左 侍文もあるし・その外よもとゝ」

げよきゝしゝゝうもあゝ侍ふ 十四の巻 左 ゝうもの句をけづりてゝふて

きるべし

月おゝ〳〵ゝ侍よ 九の巻 右 ゝうの句をけづりて次のあゝ句てよてきゝ侍

ゝゝ侍ゝう

九の巻ら 左 大君と中君とのあけくひる侍ふ侍ふいへるとゝそうらうへよか

ハまるハいぶゝ

女だゝのおくふのきを 十三の巻ら 右 女ハら・一本よ女ハゝとあるゝろし」

又結ゝるゝも 十六の巻 右 ゝるゝ侍ゝ例のゝを侍まるあり

彼侍名の封つ侍ゝう 四十二の巻ら 右 小侍よ云云とあまゝど・今ゝふよ・先ゝ侍

柏木君の自つけのゝ〳〵し・封ゝるべし・扱ゝて上といふゝもゝをう

へよとぞうとあるるれ。今ハのきハ。女三宮の御法ようてまつらんと
て対ぢおろれしを。女が侍従よりこさんとするゆもえ
あんで今まで女がねぶるりしかり。あくるもおそろしく覚え給
とあるを見ふべし。もし女が給ふうとせバ。柏木君の御名をいう
でうかんん

椎本巻

いとゞ白ひまさり給世の営（十の巻 右）白ひまさりゆく世のとつぐけ
よむべし
そのころよりもうふまじきよとあるバ（十七の巻 右）一本ことあるバ。
とあるゞ御世よてハろろし

あるようゞ（廿五のひら 右）あるゆうてきりてたゞを下よつけよむべきん
おもひろしゝ。ゆへ（廿七のひら 左）くつしハ例のくしゆゑべし。もしくへ
なうろろしとあるんよハつもしゝゞしくよむべし。決定
てつめてハよむべゝゞ
んをけたずらゝもあり（廿一の巻 左）あるてきるあり。下へつゞるを
ろろし

総角巻

よのつねよあるよびう（ハのひら 右）よもゝ俱ゝてよの考のあるべし。洲月が
既書よハ即ぜとあり
めつゝうあるとも（云云 左 十一の巻）ゆもハ少ゞハの俱るるべし

今こゝろ後はさきはてそ 十五の句 左 きこえぐ〜てよをはもとれはず

蔭あやまりおんどあるべし

ふハるも 同 ひ上よ今一つふもどのあらしが 枝 るあるべし

さハえ見ひあ〜さむまでき 廿四の句 右 えの下よおんといよこと蔭こと

るべし さ〜では細〜のハば

かしづた雲へさせ給くんまハ 同 よつぽもあるべし

おちとまる身どもの 廿七の句 右 身どもとハこづ〜〜と中君とを

の移へるあり 湖月ともどよ消さ〜ざるハ誤あり

老人どもハそしつと見ひて 廿八の句 右 そしつといよ細ゐるだし

盃よ志損しるありとあれどいるべ時よ志損しるるを

志るべきやうあり 中君のおハ一面をもゝ〜ぶ 又下よ奉ハあるとに

蔭りてあさまし かりるはんづるきをきく あ〜ハしてとあ

るをるべし うへすく はそしつんゐるべし さて見ふよ帝

本巻よいひそすといふとあるそれのんこるまと同じきまやさ

らバんすくこのそぬすを 老人どものたをつまて志ひてゐる

しぬるをいくるあや

廣方人ハるつゐ 廿五のむち 左 墨云 つ〜のを誤るふて 廣方人のあるべし

されハよ見ひつるまあり 廿六のむち 右 見ひハお屋しとあるへきことあるべし

俱歩るあるべし

かゝるあし世よあるんやとのすへハ 卅のひち 右 一本以下よ必〜〜うく

そきゝ給くいふまを

いひそゝにそめ給へる　同　一本よそをそう給へるとあるところ

ちゝくそづゝしさも　四十四の巻　右　一本ハ下よおそろしさもとしるす有り

いと心づくしまんどと思ひしも乃を　五十三の巻　右　大君の家ハ夕の上

まてかくるめをばみゝとおぼしくをとゝ有りされバ決よ身まさり

て云云との給へり細の内歟ゝ有るべし

かやうのそうゝ有るゝごとも云云　八十二の巻　左　湖月傍注師説ゝ

まいりよゝして　八十三の巻　左　一本れいのさまよゝ有るゝてとあるところ

こゝちよ思ひ出すまゝく念ゝ少ゆる　同　こゝろよゝ有り他なさぶゝに

こゝちよとあるもあり俱ゝ有り念ゝとハ大君のつきゝ給ハんの有よ

びもん世もあゝんゝと念ゝつまつをゝ

思るまくよ扨のゝれ切やうまて　八十六の巻　右　是ゝ有り弟子の地ところべゝし

上よゝどもゝおちゝさる屋ゝ　さゝでハ薫君の内井の網と弟子の

地とへゝらてゝ

ゝとのゝこゝろゝ　云云　八十七の巻　左　下のゝとハ薫君の下のこゝろゝ有り下のたゞ

うち侍ゝひてゝいよ数へて下のゝハさるゝ物ゝてもたゞ大君ゝ

まひゝやうまて云云ゝいふこゝろゝ有り

このゝのくかくゝゝ有ゝひをまうて　八十八の巻　左　云云　殿のゝのもゝのてゝをは

のゝくのひのゝ思ひきこゝえんゝまかゝまうきこゝハ人ゆ思ひゆの

あれバのもゝをうけてゝくのへ

かくつまをれ物〜　六十四の段　中宮のつまおきたれば宮の御〜まうく見給へ
物〜〜とあり小橋よりとあら波をよせ〜れるまどさゞらか
らぬ云さまあり

早蕨巻

そゝろをれすをもかゝをとりて　二の段　返歌をするよりかけ方のかの紙
をとり〜あるハ東の紙をとりていふ物ありれがくいへるゝ又ハ方よりむよりあ
らでゞ古き方のかゝをとり出ていひハすをいへるゝ又細流の内説のごと〜
まて来立なゝ来をとりまて連方のやうまゝうふるべ〜
かゝやうのも思そめ〜ゝるゝど　八のひら　左　〜かゝこそのとまりあり〜るとハふ
んぐ〜ゝむべ〜

さいぐゝよかけをれすれ方よりゝど八　元　元　同　中の君を薫よりとんぐけのひ
〜ゝをらふるべ〜下のゝいまえせ〜ゝまゝじのとふ詞のけぐきを
思ふべ〜
こゝをだあまをそ〜ぐ〜と　十四の段　右　あまハかれゝあ〜〜れゝるべ〜あ
れまてハ紙〜〜のまゝ

やとり木の巻

ゝまゝる〜〜とえゆるふ〜〜も　二の段　右　中宮よりあり給やうのまとらべ〜
こゝとゝ〜びて〜〜も　十九の段　右　〜とゝ〜びてもあり〜ゝもゞ心を〜
一本をゝのゝきこゝえ　廿五の段　左　し上よ句をきるゝろ〜
さいをひおを〜〜ゝるゝとゆゆる　廿二の段　右　一本とハゆゆるゝとあるゝろ〜

添中納言ときとうくまいひあるくふ 世六の引 左 あるくぶまハあくにあ習くふ
あり又注どもすべて白薫ひとくくとくくまるハいたゞき文の註も
白とう薫のまきう注へるうくあるもや
このこそくく注へる 世八の引 左 細まこのこまくたるやうのんどあるまうぐ。
帚木巻のいひそ〳〵のそ〳〵と同意ありんう又注へるハ注へまとある
べ記を上のそをそとんはたゞひて注ようつくひゞめたうう
さすくへんとすくらんとのこ 六十二のむら 左 一本すくんくくのことあるまろ
人新もことみえず 六十五の引 右 一本ことまといふ紙あ記ぞのき
けせうまもあまバ 六十七のむら 右 けせうハ頭昭あるべ
けふをもあるぬ 九十の引 右 あるぬ一本わるぬとあるまろこゞふべ

東屋巻

さるたうもうもうのまとくまやしあり 七のむら 右 嘉基云注へまハ注へ注へふる
ともくらく方の注べとうやハ第木よいのことどとうやきんと 云云
浮舟ま女房まもれとうやさんと 云云の記皆俗まやくあげるとうふ
意あり
いまやうのまそとゞあるまゞう 同 左 こくそきうて上へつゞけ次のもて
あゞめてを下へつゞけとむべ
ぞ傾の内むこまあり注へやうのきんさち 九の引 右 注へのうもゞ行あり
むつくきまハをうく注へともも 四十一の引 左 注へともあるべ
世中ハあゞくく 四十三の引 左 あゞくくのまハ有注へのあうまて考まふ

みぐるくしとハ吳服

ゐまうげこそ 四十八のぢら右 いとちのまうげとしるす。江戸人高田子清ヶ松屋叢話ニ云く。源平盛衰記十三の巻ニあり。同廿二の巻ニ六平がうるき峯ニのぐり。眼うげをきしてゐるとしるす。紹あり。鼈の立て。お足を目の上ニかぎして人をまもるゆゑ。今もあるをいとちのまうげといへるなり。

いへり

愛ゐていう〜ゐゆるゝ。 五十二の段右 一本。るとの二字をらんとせるところ〜

ゐさまどものゐひ出ゑバ 同左 のもどハぞ〜誤迷るなるべし。さしてハ出ゑバ〜出〜ゐれバとあるべきなり。

つゑゐ〜ゐがゐる〜もこそゐられ 五十二の段左 いゐ〜〜といふ〜

すぐれさまへりとゐえゐる者なり。傍注ニぐべり。若葉巻云。明石の入道の娘かしつゐゐる家いとゐ〜〜ゐ。ゐ。ゐもあり。

おゐのゐゐゐゐゐ〜〜〜ゐ。ゐもかゐるゐもぎの丸ゐゐ 六十二の段左 きく

弦の上ニゐをといふゐおちゐもぎのやゐゐもぎおちゐ〜ゐや

あやゐ〜ゐゐゐ〜き夜ゐゐ 六十三の段左 山下ニゐもぎおちゐるべし。

おくてハ絢とくのそば

浮舟巻

まづゐのゐゐのゐこゐゐを見出きこ 潮月本ニ誤る ゆゑど 廿一の段左 丹後屋云。きこゆゐてきれてだれとゐ〜ぬをとあゐ〜ぐだもぎのおちゐるあるべ〜といへり。げニさるゐあり。

いとあしきものゝ例 左 廿九の巻〜 ゝるハ例のゝの俱あり

又は人よりたてまつらんを思ひやるもん 左 卅の巻〜 は人ハ自宮をいふ

傍注薫君とするハひがゝとあり

おのづゝあるまじきを 右 廿二の巻〜 こてよおち俱などあるべし・ゑゞゝく

きをの二もゝをおどとしてよめゞ字ゆるあり・次の紐ハ第三の花

あり

ちゝゝよびよせてと思ふる 左 四十五の巻〜 ゝるハ例のゝあり

いゝゝゞゐまきりてあゞめ侍る 右 五十二の巻〜 是も侍らとあるべきゝゆゑ

上のうゝろめゝゝゝゐんハゝゝまへハかゝらずきれゝゝとゝんぎれハ紐

ゝゝのたゞ

かくいゝゝゞく 右 六十二の巻〜 くハどを誤まるあるべし

ひとゝゝくよつけて 左 六十三の巻〜 ゐゝゝゝくと同じこの紐ていつまかひ

とゞよつけてあり

蜻蛉巻

物も覚て侍そゞ 左 三の巻〜 侍へずとあるべし

下すもゞゞるもいふあり 左 四の巻〜 もゝゞる紀本を小振よゝゝと

定名ゝまてるハいうゞある方まきまり

をこありと思つまゞ 右 十七の巻〜 つゝハペを俱きりと又ゆ

いゝゝめゞゝ。 云云 同 小振よゝあゞゞ紀とある本をうゝとせ

らまてるハいうゞ用ゝきのいさゝゝゝゝゝゞ用あるを自宮と

の中のみを。ゑみまくるけしきあるをいふ。こぐらとはくらるハむぐらなり。
いうでう少ほき谷をもゝくめいでまし。いとゞうう紀水のちゞ
つま 廿八の巻 左 ともゞ。うきくうけてんぬきバゆえハすれど。硯稿うち
らゞ。ゆえ。ともゞの下よ。もしくハ。ゆるゆるどいふ。詞のおもしろ
んうくゆたまくるげきけるよ 廿二の巻 左 ゆもゞ。一本もとあるよろし
母君も来いて 廿四の巻 左 傍注よ。来居ゝとあるゝ。いいぬとすべし
いきたくまし。うゞ 廿五の巻 右 こくまていひさして。詞きるくあり。下へハ
つゞらゞ。下よいうよあくまし。とてもかくてもとやうの詞どそ
へてんぬべし
あやしうゝやびうよおうし紀はうこのを指よゝである 四の巻 左 この

下よゝどもゞあるべし。どもゞあくてハ。蓋の心とハいひがゝし。たゞ
巻紙の地の詞あり

手習巻

きれハうそあやしきはあつうひあうとハいくど 八の巻 左 こそそまて
きまきうゞ。下よ。含る詞あり。いゝどハいくゞもあり。小指の法の如
くまてハゞくといふ詞ろろし。必いひつまとてとあるべきなり
又ぐるしきよざうか 九のひち 右 倍よこまだ物式といふがごとし。え
ぐるしハゞるよ苦しき紀あり。はうゞ。ゆるゝ倍よ面扱といふがごとし。
考よゝふ又ぐるしとハ。人ゝ少しき吳あり
かはいさうあのまくとひつぐくれど 九の巻 左 どハゞの誤るべし

し。是いへり

〻ふ〻ひ出るも（十の巻）右　出る者のとあり〻〻ぶ下よ相俗といふ

詞のある小紛まて。文字二つ字〻〻〻〻るべし

今ハうばかりまていとうやめまりあく（十七の巻）左　やめハやすえのす

をあとせるべし。いとうハ病をいふよあ〻ぶいとうるとやす

むると。二つをつけるあり

いとい〻〻〻〻て（十八の巻）右　けとてハとおぼして。といふさく世中

小ぬほといふようこあり。浮舟君のん中のまれバあり

まつひまとハさて（廿三の巻）右　まつあさて〻あり。ともどすむべし

いうふも〻〻人よええん〻そて（廿四の巻）左　こそといふ詞いうぐこゝの保乳

げふ何んあくうつく〻〻（廿七の巻）右　こゝ浮舟君のさまを尼君のくゝる

んを。笹みの地よりいくるあり。うちあてぞ（云云）　云云ゝ尼君のまあり。

小橋よ（云云）とあれど。さ〻ずゝもあるあんさどし本文うつくしき

をとあ〻ん方。まさるべきう

いまやうハをき〻（云云）左（廿三の巻）今やうハと。下のいまハと。詞かさあり。て

ゝのぐ

いときせん大とゝあり。て（云云）左（廿八の巻）是ゝ尼君の詞あり。僧都

の詞とするハひゞとあり

うらゝ〻ゝあり（五十四の巻）右　僧都のもとく使の俗うよ怒こいひおこせ

ゝ〻あるべし。まて怨むるハほよあり。嘉基ハ云伝うあんとあ

ア〜をほ小書俗当るなるべし

の結ひもあたせばなるふるることをなん 五十五の段 左 をもし衍なるべし

いのちハ葉のうすきごとし 五十六の段 右 この作者詩のんをとりあや

まりぬとゑえらり命の落きとハもとすくせのつきなれるすをいへ

るなり

いもうとなるべし 六十二の段 左 嘉基云こゝ紀伊ちう妹なるゆ論なれを

小根よ尼君の妹なんとあるハいかゝ女どちの兄弟ハ姉おゝこと

こゝそいへいもうとゝハなるべ男の方より女の兄弟をいふ河

なりとハ此大人も論らひおうまし〜するをや

なりてのちも 六十八の段 左 勗云きこえてはもなるべし中宮よりの

夢浮橋巻

すけせ〜めさてまつアて〜よ侍る 七の段 左 ゐる奉例のアをあや

まるなり

玉小櫛補遺下巻

在経盈大人の玉小櫛ハ源はてざる出て後の補ひをもとる心ある

る奥出よい〜たるゆ〜おのを今ゆ志をつぎてかく拙〜る

も経たゞうそそバよて更よたならへりとハいふべくもあ〜ず えより

をぢあきゞよよ暇もあき程のあ〜ざる〜あアえれバ経後の

人の補ひ又正〜をまつ仏ゆてゞ

玉小櫛補遺下 ○世七終

玉小櫛 ○世七終

文政三年庚辰春
新刻

尾張
波奈仙屋藏板